



(京都西南部)

京都・長岡宮跡
ながおかきゅう

- 1 所在地 一 京都府向日市寺戸町小佃、二 同森本町下森本
- 2 調査期間 一 一九九五年(平7)一〇月～一九九七年一月、
二 一九九八年二月～一九九九年三月
- 3 発掘機関 (財)向日市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 一 梅本康広・松崎俊郎・松田留美、二 中島信親
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 長岡京期(七八四年～七九四年)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一 宮第三一六次調査
(長岡宮「北苑」)

調査地は、標高一八mの氾濫原に位置する。長岡京の復元では、推定北京極大路と仮称朝堂院中軸宮内道路が交差する付近に位置する。交差点の北東側に相当する第二調査区では、長岡

京期の溝三条、池状遺構一基、掘立柱建物一棟ほかを確認した。溝は、条坊計画に基づいた東西道路の南側溝と築地をはさんだ宅地内の雨落溝である。池状遺構は南北一六m東西五m以上、深さ〇・四〇・六mを測り、方形を呈する。掘立柱建物は、桁行三間以上梁行二間以上で、柱間は三m(一〇尺)等間である。離宮ないしは官衙の中心的建物に相当する規模を有している。

今回の調査の特筆すべき成果としては、推定北京極大路よりもさらに北側の地域において、築地塀や道路の側溝などを確認し、条坊計画に基づいた土地区画が宮城の割付の延長上に展開していることが判明したことがあげられる。唐の長安城や平城京では、宮の北側に皇帝などが遊宴するための宮廷の機構に関わる施設群が存在したことが確認されている。したがって、今回の調査地及びその周辺地域は、苑地に相当する一画であり、とりわけ菜園の一部と宮廷に関わる公的施設を確認したものと判断される。このことは長岡京期においても「北苑」と称すべき苑地が備わっていたことを初めて明らかにしただけでなく、我が国の都城制のあり方やその変遷を考える上で大変意義深い成果を得たものと思われる。

木簡は東西溝SD三一六二〇一から一点出土したが、小片のため釈読できない。同じ溝からは墨書土器「福」が出土している。

二 宮第三七三次調査(長岡宮北辺官衙(南部)、東一坊大路)

調査地は、標高約一四・九mの氾濫原に位置する。長岡宮の官衙

復元では北辺官衙（南部）の最南端で、一条条間大路に開く宮城門の推定地にあたる。調査では、長岡京期の条坊側溝、門関連遺構、井戸、溝、流路などの遺構を検出した。遺構の重複関係から三段階の変遷が想定できる。

門関連遺構とは、基壇基礎最下部の地業である。条坊側溝を埋め戻して整地した後、礫・木材などともに埋めながら、根固めしている。基壇上部は削平され、根石掘形を検出できなかった。また、宮内一条条間大路を約9m（三〇尺）の小路幅で確認したこと、井戸側内から一括性の高い多量の土器群が出土したこと、諸遺構、包含層から多量の軒丸・軒平瓦、銭貨、墨書土器が出土したことなどの成果を得た。

以上の成果から、地業跡は後期段階の小路に開いた門に伴うものと考えられる。地業内に基壇が設けられていたとすると、その規模は他宮の宮城門に比べ、小規模であったとみてよい。後期造宮段階に宮城南面に南に二町拡大された際、宮城によって分断される二条大路に開く宮城門が設置された可能性が高いとすると、長岡宮の四面には平安宮と同じく、東西両面に四門、南北両面に三門の一四門が配置されたことになる。すなわち、今回確認した門は、東面最北に位置することになり、平安宮上東門に相当するものと考えられる。平安宮の上東門は、壇のない簡素な土門と言われているが、長岡宮では小規模ながら基壇をもつ礎石建物の門が造られていたことを確

認した。

木簡は井戸SE三七三〇九より四点（うち削屑三点）が出土したが、いずれも小片のため釈読できない。

8 木簡の釈文・内容

一 宮第三一六次調査（長岡宮「北苑」）

(1) □ □ (34)×(5)×(2) 081

二 宮第三七三次調査（長岡宮北辺官衙〈南部〉、東一坊大路）

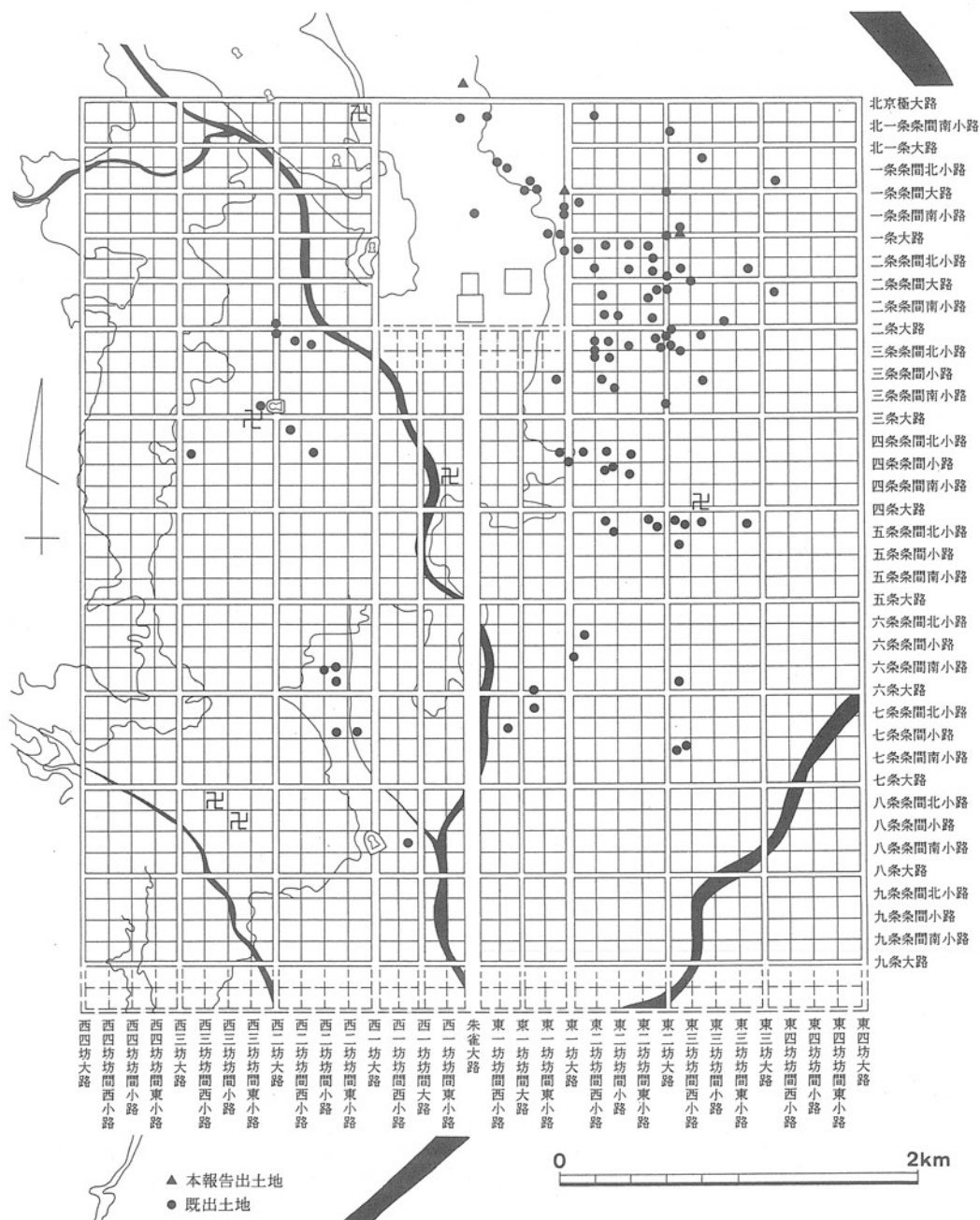
(1) □ (20)×(10)×2 081

9 関係文献

（財）向日市埋蔵文化財センター『長岡宮「北苑」宝幢遺構』（向日市埋蔵文化財調査報告書六六、二〇〇五年）

同『長岡宮「東面北門・宝菩提院廃寺」』（同七〇、二〇〇六年）

（一）梅本康広、二 中島信親、釈文 佐藤直子



長岡宮・京跡木簡出土地点図